

江藤新平と明治維新

平成18年7月15日 辰巳 博司

1、取り上げた理由

江藤新平についてのイメージ：明治6年征韓論に破れ、参議を辞任後、郷里佐賀に帰った江藤新平は明治7年、不平士族の集団を率いて乱をおこし、捕われて処刑された。時代を見誤り、時の政府に反逆したとの悪いイメージ。

明治維新史を調べていて、そう単純なものではないと思い、興味を持った。

2、経歴

- * 1834年肥前国佐賀八戸村に生まれた。父は手明鐘（てあきやり・佐賀藩独自の侍の階級・士族・足輕の中間に属す）の身分。貧乏だったが母が教育熱心で、幼年期に「四書五経」（大学・中庸・論語・孟子及び易経・詩経・書経・礼記・春秋、の儒教の基本となる書、経典）などを学ぶ。貧しかったので弘道館（藩校）で学んだのは12歳から。1849年16歳の時に弘道館書生寮に寄宿、1850年、副島種臣、中野方蔵、大木喬任（後に大隈重信も参加）らと枝吉神陽（1822生、弘道館教授・副島種臣は実弟・国学・尊王論を説く・若者への影響大、佐賀の吉田松陰といわれる）の義祭同盟に参加。
- * 1853年、蘭学塾で2年学び、その後長崎で海軍伝習生として学び、家計の事情で1854年21歳で弘道館と共に退校。その後は独学。1856年、23歳の時「図海策」（攘夷の批判、人材の登用の重要性、開国通商の重要性、北海道開拓の経済的効果などを述べる）を書く。この時期、木戸孝允（24歳）、大久保利通（27歳）ですら尊王攘夷だったから先見性があった。24歳時、結婚と共に役勤めを志願、砲火術方目付（砲兵隊監督）、27歳、上佐賀代官手許（主君の代役の代官・補佐）、29歳、貿品方（貿易を扱う）に。
- * 1862年、29歳、大木喬任（31歳、明治政府の初代文部卿）から資金援助を受け、6/27脱藩京に上った。中野方蔵（弘道館で共に学び、義祭同盟で盟友で江戸の昌平黌に遊学、横浜異人館焼き討ち計画に関与の疑いで捕われ、獄死。27歳、5/25）。の影響が大きかったと言われる。（多分そうであろう。決起を促す手紙が大木などのところに來ていた由）王政復古に藩論統一を目指していたが、藩主直正が動かない。京に上がり勅命により藩主を動かしたかった。京都では、長州藩の桂小五郎に面会、その紹介で尊攘派の中心公卿・姉小路公知と面談、佐賀藩の状況、立場を弁明している。僅か1ヶ月の京都滞在で、見聞した事を「京都見聞」にまとめ、佐賀へ帰った。脱藩の罪は死罪に相当したが、「京都見聞」に目を通した鍋島直正は、これを評価して永蟄居にした。
- * 永蟄居となった新平は、山中の廃寺金福寺に仮住まいし、寺子屋を開き、近隣の児童に読書、習字を指導し、その僅かな謝礼で生活。1864年、11月から佐賀城内丸目村に移転。この頃、佐賀青年党の中心人物と仰がれ、山中一郎（16歳、明治4年欧州に派遣され、政法を学び6年に帰国、同年新平と行動を共にし、7年斬首、27歳）、中島鼎蔵（15歳、戊辰戦争に参加、維新後左院に勤務、明治6年の政変後佐賀に戻り、新平と行動を共にし7年斬首、26歳）徳久幸次郎（18歳、戊辰戦争に参加、明治5年左院小議生、佐賀の乱後薩摩に行き、西南戦争で戦死、32歳）丹羽意之助ら、青年有志が入りしていた。蟄居中、古賀一平（明治4年、初代品川県知事）、大木喬任と謀り久留米の真木和泉を訪ねたが会えず、弟の外記と会い、外記の紹介で長州の土屋矢之助と面会、長州藩の動静を聞いた。
- * 1867年、34歳、政局の動きに伴い、永蟄居を許され、郡目付（郡の見廻り役のようなものか）となり、藩主直正に先行して京に上がった。大政奉還後も佐賀藩の立場がはっきりせず、薩長の誤解を招いたが、新平は知遇を得ている木戸孝允、三条実美らに長崎防衛の重要性を説き弁明した。佐賀藩は海軍力が見込まれ、孟春丸、観光丸（幕府から預かり）をこれに当て、関東征伐海軍先鋒となり出陣した。1868年、江戸城開城後も関東の情勢は不穏、佐賀藩徴士（明治政府がスカウトした各藩からの人材）として朝臣となった新平は土佐藩士・小笠原喜八（1829～68、彰義隊戦争、東北戦争で功をたてたが、会津攻撃戦で戦死、40歳）と共に征東大総督府・関東監察副使として江戸に向う。（西郷が朝廷に強く推挙した由）道中、新平は小笠原に対し、廃藩・郡県制への移行、江戸遷都を語ったと言われる。
- * 1868年、江戸城に入った新平は幕府の政治関係の書籍を重点的に調べたといわれる。更に、上野彰義隊征討戦では、征討大総督軍監に任じられ、大村益次郎（1824年長州生、医者後に兵学者）を助け功績をあげた。同年、江戸府判事、江戸鎮台（軍政）判事となり、東京遷都後、東京鎮将府（民政）の会計局の判事となる。鎮将府廃止後、会計局は東京府・会計官出張所となり判事。1869年3月、直正の推薦で佐賀藩に戻り、佐賀藩権大参事に任命され藩政改革を行う。
- * その後11月、政府より上京を命ぜられ中弁（太政官：東京政府の補佐官に相当）に任ぜられる。「海陸

軍備方案（海陸軍の建設、整備をいかに行うかの案）」「国政改革案（新政府のあり方案）」「国法会議の議案（法整備のあり方）」を太政官に提出した。1871年2月には制度局御用掛兼務となり、議事機関、法律制度の調査、立案を委任された。「官制改革案」によると、立法、行政、司法の三権分立を説き、兵部省を解体、陸軍、海軍の両省に分離する案を提案、採用された。廃藩置県にも岩倉具視、木戸に協力。7月、制度局兼務で文部大輔（たいほ・文部次官）になり、文部省官制、職務規定を定め、大、中、小の教育制度を考案、大木文部卿が学制発布した。8月、三院（正、右、左）の中の左院（立法の諮問機関）の副議長になる。（1871年（明治4年）11月岩倉使節団出発）1872年（明治5年）3月、教部省（宗教統制による国民強化の目的で設置）御用掛を兼務。宗教の自由化を推進したが抵抗も大。4月、御用掛を解かれ、司法卿（大臣）に就任。司法権の独立、裁判所の設置、民法の編纂、警察制度の調査を行う。その間、汚職の調査も進め、山城屋事件（陸軍の御用商人、和助は奇兵隊で山縣の部下、陸軍が公金を勝手に貸付、見返りを受けていた、返済不能で自殺、闇の中に）で山縣有朋を、尾去沢銅山事件（南部藩との貸借にからみ、大蔵省が村井茂兵衛から銅山を取り上げ、格安に井上馨（大蔵大輔）が知人の岡田平蔵に払い下げた）では井上馨を辞職に追い込んだので、長州閥から敵視されるようになった。大久保利通（大蔵卿）は、使節団に参加で留守中の出来事。1873年（明治6年）4月、新平は後藤象二郎、大木喬任と共に参議になる。同年5月「興国策（兵制改革による武力の充実による外交と共に、法制を整備して外国の信用を得て不平等条約改正を説く）」を執筆。朝鮮問題（開国を迫り、外交関係を結ぼうとするが応じない）が、留守政府の課題となり、派兵論を押さえ、西郷を遣韓大使として派遣することが決定された（8/17）が、発表は岩倉使節団の帰国後ということになった。帰国した大久保（5/26に帰国）岩倉（9/23に帰国）は、遣韓大使の派遣に反対の為に策謀を巡らせ、天皇は派遣を裁可しなかった（10/23）。政府への不信から、10/24～5、西郷、江藤、後藤、副島、板垣の各参議は相次いで辞任した。1874年1月、新平、板垣、副島、後藤等は久保の専制を世論の力で阻止しようと「民選議院設立建白書」を提出し、愛国公党を結成した。

*佐賀藩の士族は、尊王運動に立ち遅れ、戊辰戦争では薩長土に対し大きな功績はなかった。その立ち遅れの汚名を征韓でそそぐべく征韓党を結成意気盛んであった。また島義勇を党首とする、新政府の欧化に反感を持つ憂国党も結成されていた。佐賀では、政府の征韓論に反対の方針に激高して暴発しそうな状況であった。それを憂慮した新平、副島は帰国し、道を誤らせないように説得しようとしたが、周囲は、帰国が火に油を注ぎかねないと反対、副島は断念した。

*江藤新平を肅清するチャンスと見た大久保は、岩村高俊（土佐藩出身、戊辰戦争の長岡藩との戦いで、家老・河井継之助の和平提案を蹴り、壮絶な戦いとなった。高慢、無思慮な性格との評）を使い、挑発して佐賀で戦争を仕掛け、まだ新平が長崎にいる間に戦いは始まっていた。新平は島から状況を聞き、武力抗争止むなしと、長崎から佐賀に入った（2/12）。佐賀暴発の知らせを聞いた大久保は、自ら軍を率い鎮圧に赴いた。2/22から第2次の佐賀の役が開始された。もともと戦う気のなかった新平は、戦況が不利になると、鹿児島に西郷の助力を、更に土佐の立志社の応援を頼みに行くと述べ戦線を離脱した。

3/1 新平は西郷と面談するが援助は断られた。更に3/25に土佐で片岡健吉、林有造と会うが結果は同じだった。最後に、東京に行くべく阿波に向ったが、土佐の甲浦で捕縛された。軍艦で佐賀に護送され、佐賀城内の監獄に入れられたのが4/7、4/8には法廷に出廷、裁判らしきこともせずに、4/13には、「除族の上、梟首申し付ける」という極刑が言い渡され、即日執行された。

*新平の罪名は1889年（明治22年）大日本憲法が発布されたときに消滅している。そして、1911年（明治44年）3月には新平の功績表彰が帝国議会で満場一致で可決。翌年の1912年（大正元年）9/12、罪状消滅の証明書が遺族に交付され1917年（大正5年）、佐賀の役で剥奪された正四位を復位追贈された。

3、江藤新平の生涯についての感想

*新平の生まれ育った佐賀藩は、教育熱心な藩で、藩校の成績で相続する禄高も左右されるようになっていた。貧しくて、一般の藩士の子供は6歳から弘道館に通ったが新平は12歳からだった。母親が教育熱心で自宅で教育をした。この環境が彼の人となりに影響したと思う。常に鬱懷（晴れ晴れとしない思い、欲求不満）をもっていたと司馬は言う。

*16歳で弘道館の寮に入る。弘道館教授の枝吉神陽の影響で義祭同盟に参加、尊王論に傾倒した。仲間に、後の明治政府で重きをなした、大木、副島、大隈など若き人材がいた。多感な年代、お互いに喧々諤々論じ、相互に影響しあったと想像される。

- *弘道館を退学後、僅か23歳で、日本の海外対策を研究し、1856年9月に「図海策」を草した。内容は、攘夷は不能・その理由、人材登用の必要と効果、通商国家になり富国を、北海道開拓の経済的効果など、時代の先を見た卓越したものだった。当時は黒船来航3年目で、尊王攘夷と開国がせめぎあっていた時代だった。恐らく、佐賀藩は長崎の防備を担当、長崎から多くの海外情報を仕入れたのだと思う。
- *26歳で砲火術方目付になる。佐賀藩は、長崎の防備を担当していたので、製鉄（反射炉）、鉄砲製作・大砲鑄造技術、軍艦製造技術で当時の日本をリードしていた。対外的には、秘密が洩れないように厳重に国を閉ざしていた。新平は、この実務経験が後の彰義隊との戦争で生かされたと思う。
- *27歳で上佐賀代官手許に。29歳で貿易方に。これらの実務経験もその後生かされたと思う。薩長土の志士達が、政治的駆け引き、戦争等に傾倒していた時期にである。ひとり、海援隊を組織し海運業をやり、船中八策を起草し、維新後の政体のあり方を建言した坂本竜馬がいたが、維新の前年に暗殺された。
- *29歳のとき、脱藩、上京、木戸孝允、伊藤博文、姉小路公知等と面談、僅か1ヶ月の滞在だったがその後の活動の為のコネつくりになった。見聞した内容を「京都見聞」にまとめ、藩主に提出する機会を得て、密かに認められ死罪を免れた。聡明と言われた鍋島直正は、時代の動きを知っていたと思うが、慎重な「葉隠れ精神」で様子を見ていたと思う。
- *34歳、大政奉還、王政復古と共に、新平は上京、工作をして、軍艦、大砲の提供など佐賀藩の強みを生かし、戊辰戦争に参戦、辛うじて維新後の発言権を確保でき、新平の能力も認めさせることが出来た。
- *35歳～40歳の6年間は、中央政府に出仕し、あまり行政能力のない西郷などにも重用され、東京遷都、諸制度の立案、版籍奉還、廃藩置県、教育制度の起案、法治国家を目指し初代司法卿に就任、法整備、警察、裁判制度の制定に努めた。
- *明治4年11月12日、まだ新政府の基盤も固まっていない時期に、右大臣・岩倉具視、参議・木戸孝允、大蔵卿・大久保利通、工部大輔・伊藤博文、外務少輔・山口尚芳など政府の主要なポストを占める高官が使節団として出発、欧米を巡回した。帰国は、岩倉が明治6年9月13日、大久保が5月26日、木戸が7月23日だった。新平は留守中の明治5年4月25日に初代の司法卿（大臣）に就任、司法裁判所の創設、司法省の体制整備、法体系の整備に努めている。その間、兵部大輔・山縣有朋ら陸軍と御用商人・山城屋との不明朗な関係、大蔵大輔（次官）・井上馨（大蔵卿・大久保の留守を預かる）と尾去沢銅山松下げについての不法を追求し、辞任に追い込んだ。
- *大久保等の留守中の、明治6年4月19日、新平は後藤象二郎、大木喬任と共に参議に就任。これらの留守中の出来事、新平の行動と影響力の拡大、薩長閥に対する日頃の批判などが大久保に危機感を抱かせたものと思う。
- *一旦決定されていた西郷の朝鮮派遣が、帰国した岩倉、大久保の策謀で否決され、怒って参議を辞任した西郷、副島、後藤、板垣、江藤なきあと、大久保は内務省を新設、内務卿となり、警察、地方行政の全権を集中、専制政治を行った。独裁者は危険なライバルを抹消するのであろう。その大久保も西南戦争を抑圧した翌年の明治11年に暗殺された。島津久光の命を受け、明治維新を行った西郷、大久保とも、久光の意に反した結果（藩籍奉還など）から、久光は両者を終生、許さなかった。鹿児島での大久保の評判は悪く、銅像が建ったのは戦後の1979年であった。歴史を考察する時、表の動きと共に、裏の様々な人間関係、感情の影響により動くのは、何時の世でも変わらない。

4、参考文献

- *江藤新平についての多数のHP
- *歳月（著者：司馬遼太郎 講談社文庫、江藤新平を主題にした歴史小説）
- *「脱亜」の明治維新（著者：田中 彰 NHKブックス 452）
- *大世界史21巻・明治百年の序幕（著者：芳賀 徹 文芸春秋社）
- その他多数